

2022/04/25

TOP コレクション メメント・モリと写真

死は何を照らし出すのか

TOP Collection: The Illumination of Life by Death

Memento mori & Photography

2022年6月17日(金) — 9月25日(日) | 2F 展示室



マリオ・ジャコメッリ

《やがて死がやってきてあなたをねらう》

1954-1968年

ゼラチン・シルバー・プリント

東京都写真美術館蔵

Courtesy Archivio Mario Giacomelli

© Rita e Simone Giacomelli

展覧会概要

TOP コレクション展は、東京都写真美術館の 36,000 点余り*の収蔵作品のなかから、珠玉の名品を紹介する展覧会です。本展は「メメント・モリ」をテーマに、人々がどのように死と向き合いながらも、逞しく生きてきたかを約 150 点の写真作品等から探り、困難を伴う時代を前向きに生き抜くための想像力を刺激します。

ラテン語で「死を想え」を意味する「メメント・モリ」は、人々の日常がいつも死と隣りあわせであることを示す警句でした。この言葉は、ペストが大流行した 14～17 世紀の中世キリスト教世界において、骸骨と人間が踊る様子を描いた「死の舞踏」と呼ばれるイメージと結びつき、絵画や音楽など芸術作品の題材として広く伝播していきます。一方で、写真もまた、死を想起させるメディアであることが数多くの写真論の中で度々言及されてきました。

本展では、死の図像を描いた版画作品および、ウジェーヌ・アジェ、W. ユージン・スミス、ロバート・フランク、マリオ・ジャコメッリ、藤原新也ほか 19 世紀から現代を代表する写真群から「メメント・モリ」と「写真」の密接な関係性を再考します。

*令和 4 年 3 月末時点

メメント・モリ | Memento mori

ラテン語で「死を想え」という意味を持つ「メメント・モリ」は、キリスト教世界において、人々の日常がいつも死と隣り合わせであることを示す警句でした。この言葉は、ペストが大流行した中世期に描かれた、骸骨と人間が踊る様子を描いた『死の像』と呼ばれるイメージと結びつき、広く使われるようになります。その背景には、伝染病、戦争、飢餓といった困難の多い時代を生き延びた人々が、身近にある死への恐れとともに、人間もやがては死すべき運命であることを自覚することによって、生きることに積極的な意味を見いだそうとした様子がうかがえます。

本展のみどころ

1 | 写真表現に込められた、日常を灯す「生きることの意味」

本展では「メメント・モリ」をテーマに、19世紀から現代までの写真表現を通して、人々がどのように死と向き合いながらも、逞しく生きてきたかを探ります。

ある一瞬を切り取り、感光材によってイメージを定着させる写真術は、人間がもろく、うつろいやすい時間の中にあることを示すものであるといえます。中世の人々が『死の像』のなかに、生きることへの積極的な意味を見いだしたように、現代を生きる私たちもまた、写真表現に通底する「メメント・モリ」を見出すことで、生きることの意味を見つめることができるのかもしれません。

また、本展は、時間や記憶、人間の想いを1枚のイメージに定着させるという、「写真」ならではの特性に着目します。世界的な混沌を伴う現代を生きる私たちにとって、積極的に「生」と向き合うためのヒントを得る契機となることでしょう。

2 | 国内外の重要作家によるラインアップで構成する TOP コレクション

東京都写真美術館では、写真史において重要な国内外の作家・作品を幅広く、体系的に収集するとともに、日本の代表的作家も重点的に収集しています。本展では、全36,899点*のTOPコレクションからフォト・ジャーナリズムに代表されるW. ユージン・スマイスや、ロバート・キャパ、澤田教一をはじめ、近代化により変わりゆくパリの街並みを記録した、ウジェーヌ・アジェ、ホスピスで暮らす人々の暮らしを見つめたマリオ・ジャコメッリ、など、だれもが知る有名作から知られざる逸品を紹介します。

本展のテーマ「メメント・モリ」を多角的に考察する、写真作品との新たな出会いにご期待ください。

*令和4年3月末時点

3 | メメント・モリの原典、ハンス・ホルバイン（子）の『死の像』

本展の序章として「死」のイメージとして名高い、ハンス・ホルバイン（子）『死の像』（国立西洋美術館所蔵）を展示します。現在から約500年前に、人間の生きる意味を問い、世界中にセンセーショナルを巻き起こした版画作品がコロナ禍を経て、国内で公開される貴重な機会です。

出品作家 計 18 名予定

ハンス・ホルバイン（子）

マリオ・ジャコメッリ

ロバート・キャパ

澤田教一

セバスチャン・サルガド

ウォーカー・エヴァンズ

W. ユージン・スミス

リー・フリードランダー

ロバート・フランク

牛腸茂雄

ウィリアム・エグルストン

ダイアン・アーバス

荒木経惟

ウジェーヌ・アジェ

ヨゼフ・スデック

小島一郎

東松照明

藤原新也



藤原新也

《死のとき、闇にさまようか光に満ちるか心がそれを選びとる》

〈メメント・モリ〉より

1972年 発色現像方式印画 東京都写真美術館蔵

©Shinya Fujiwara

出品作品点数

145 点

写真作品 120 点、版画作品 25 点（予定）

展示構成

序章 メメント・モリと「死の像」

第1章 メメント・モリと写真

第2章 メメント・モリと孤独

第3章 メメント・モリと幸福

序章 メメント・モリと「死の舞踏」

メメント・モリの起源、中世に流行した背景等を紹介します。

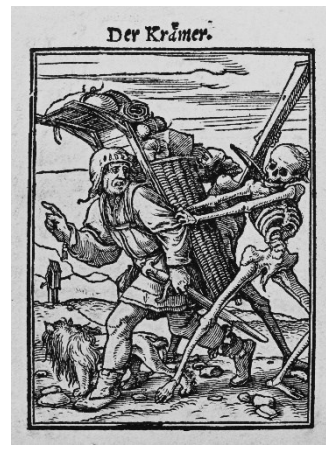
[展示作品] ハンス・ホルバイン（子）『死の像』より



0-01 『死の像』より《金持》



0-02 『死の像』より《老人》



0-03 『死の像』より《行商人》

0-01, 02, 03 | ハンス・ホルバイン（子）『死の像』より（試し刷り）1523-26年頃 木版 国立西洋美術館蔵

第1章 メメント・モリと写真

写真が死を想起させるメディアであることは、数多くの写真論の中で度々言及されています。

第1章ではフランスの哲学者ロラン・バルト、アメリカの作家スーザン・ソントグ等の著作をヒントに、メメント・モリと写真の関係を示す作品を展示します。

[展示作品] W. ユージン・スミス、マリオ・ジャコメッリ、ロバート・キャパ、澤田教一、セバスチャン・サルガド、ウォーカー・エヴァンズほか



1-01



1-02



1-03

1-01 | ロバート・キャパ《フラータ ア ラゴン前線、スペイン 1938年11月7日》1938年 ゼラチン・シルバー・プリント

1-02 | W. ユージン・スミス 《ニュー・メキシコ》1947年 ゼラチン・シルバー・プリント

1-03 | マリオ・ジャコメッリ 《やがて死がやってきてあなたをねらう》1965年 ゼラチン・シルバー・プリント

Courtesy Archivio Mario Giacomelli © Rita e Simone Giacomelli

※所蔵先の記載がないものはすべて東京都写真美術館蔵

第2章 メメント・モリと孤独

戦争、飢餓、伝染病といったあらがうことの出来ない大きな困難により、死に直面する人々がいる一方で、大きな困難に直前せずとも、死を身近に感じる人々があります。特にそれは、新たな糧を求めて、生まれ育った土地から離れた人々が、心のよりどころを見失い孤独を感じた時ではないでしょうか。本章では、人々の心に潜む孤独とメメント・モリの関係性に着目します。

〔展示作品〕リー・フリードランダー、ロバート・フランク、ウィリアム・エグルストン、荒木経惟 ほか



2-01 | 荒木経惟 〈センチメンタルな旅〉より 1971年 ゼラチン・シルバー・プリント ©Nobuyoshi Araki

第3章 メメント・モリと幸福

日々の生活の中で、目に見える世界にとらわれがちな私たちが、実は「死」というゴールを見つめることで、「生」を捉えなおし、心の安らぎを得ることができるのではないのでしょうか。最終章では「死を想う」契機となりうる写真作品との出会いから、作品がどのように見る者の心に訴えるのかを考察します。

〔展示作品〕ウジェーヌ・アジェ、ヨゼフ・ステック、藤原新也、小島一郎、東松照明



3-01



3-02

3-01 | ヨゼフ・ステック 《身廊と下側の眺め、聖ヴィート大聖堂の新しい部分の南側》〈聖ヴィトゥス〉より 1928年 ゼラチン・シルバー・プリント

3-02 | ウジェーヌ・アジェ 《ピレットの回廊、アルシーヴ通り》 1898年 ゼラチン・シルバー・プリント

公式図録

『TOP コレクション メメント・モリと写真』（仮称） 価格未定
主な作品図版、作品リスト、出品作家の藤原新也によるエッセイを収録予定。
東京都写真美術館発行

関連イベント

会期中関連イベントを開催予定です。決定次第ホームページ等で発表いたします。

開催概要

展覧会名[和] TOP コレクション メメント・モリと写真 死は何を照らし出すのか
展覧会名[英] TOP Collection: The Illumination of Life by Death—Memento mori & Photography
主催 東京都、公益財団法人東京都歴史文化財団 東京都写真美術館
会期 2022年6月17日（金）—9月25日（日）
会場 東京都写真美術館2階展示室
〒153-0062 東京都目黒区三田 1-13-3 恵比寿ガーデンプレイス内
電話 03-3280-0099
開館時間 10:00–18:00（木・金曜日は20:00まで、入館は閉館の30分前まで）
休館日 毎週月曜日（ただし月曜が祝休日の場合は開館、翌平日休館）
入館料 一般 700円／学生 560円／中高生・65歳以上 350円 ※オンラインによる事前予約を推奨
*小学生以下、都内在住・在学の中学生および障害者手帳をお持ちの方とその介護者（2名まで）、年間パスポートご提示者は無料。

このリリースのお問い合わせ先

このリリースに掲載されている図版をデータにてご用意しております。

掲載をご希望の際は、広報担当までご連絡ください。

* 図版をご掲載の際は、必ず作品キャプションおよびクレジットの表記をお願いします。

* 図版の無断掲載はご遠慮ください。また、トリミング、文字掛け等の加工はできません。

東京都写真美術館 〒153-0062 東京都目黒区三田 1-13-3 恵比寿ガーデンプレイス内
TOKYO PHOTOGRAPHIC ART MUSEUM 電話 03-3280-0034 / FAX 03-3280-0033 / www.topmuseum.jp

展覧会担当 浜崎 加織 k.hamasaki@topmuseum.jp

広報担当 平澤 綾乃 / 池田 良子 / 鈴木彩子 press-info@topmuseum.jp

本展は諸般の事情により内容を変更する場合があります。最新情報は当館ホームページをご確認ください。